

2. 古戦場エレジー(II)

七つ石稲荷神社～南立石公園～大友義統本陣跡～宗像掃部陣所跡～吉弘宗幸

陣所跡

今日は家から2.5キロほど下って七つ石から歩き始める。ここは西暦867年の鶴見山大爆発の際の火砕流によって運ばれた大岩がいくつもあるところから七つ石と言われており、特にこの大岩はパワースポットになっている。

あたり一帯が石垣原と言われるくらい大小の石が多く、それを石垣に利用したことが地名の謂れだが、ここの大岩群は割ることも、そのまま使うこともできないまま残ったようだ。

1600年の石垣原合戦では、ここで吉弘統幸が討ち死(自刃とも伝わっている)している。享年38歳だった。統幸の最後の時は今でもまるで講談のように語られているが、どういうわけか現在ここには大友義統の母奈多夫人の兄である田原親賢(紹忍)の看板が立てられていた。



七つ石にはこんな武者絵の看板が何枚か立てられているが、名前があるのはこの田原親賢(紹忍)だけである。



石垣原合戦の主戦場の一つが、この石を中心とした場所で七つ石という地名になっている。今は稲荷神社の境内となっていて、隣接して地区の公営温泉がある。

確かに田原親賢も石垣原合戦に参戦しているが、実際は義統の本陣にいて戦場に出ないまま黒田方に降伏した男だ。このひと月後に岡藩の中川秀成の与力として、田原紹任は佐賀関に太田氏を攻めた際に流れ玉に当たって戦死している。大友家凋落のきっかけとなった日向高城城の戦い(耳川合戦)の時、大軍を統御しきれずに大敗の原因をつくった男でもある。私としては吉弘統幸とは同列に語って欲しくない。

七つ石から石垣原公園に向かう。吉弘統幸の陣所跡までは、ここから境川を渡ってまっすぐ昔の鶴見園の横を通って行けば1.5キロ約20分で行けるが、ここはやはり、もう一つの主戦場である南立石公園を目指したい。七つ石から西に向かって上り、県道鉄輪線を渡り西別府病院の正面まで来るとイナコス橋という歩行者専用の橋があり、それを渡ると南立石公園である。ここもまた石垣原合戦の主戦場の一つで、戦後一度大

陸からの引揚者などが入植したが、石だらけで田はもちろん畑にするのも難しい上に、人骨が出るというので人が寄り付かなくなり、わたしが子ども頃は不気味な藪でしかなく、永い間、古戦場としてほったらかしになっていたところだ。

1971年に公園にしようという計画が持ち上がり、5年後の1976年に都市緑化植物公園として開設されている。今では古戦場という不気味さも薄暗さも払しょくされ、のどかな公園として多くの人が散策や運動を楽しんでいる。どういふわけか、公園内の池にはアメリカザリガニがたくさんいて子どもたちがザリガニ釣りをしているようだ。公園内にはここが古戦場だったことの説明板が設置されている。

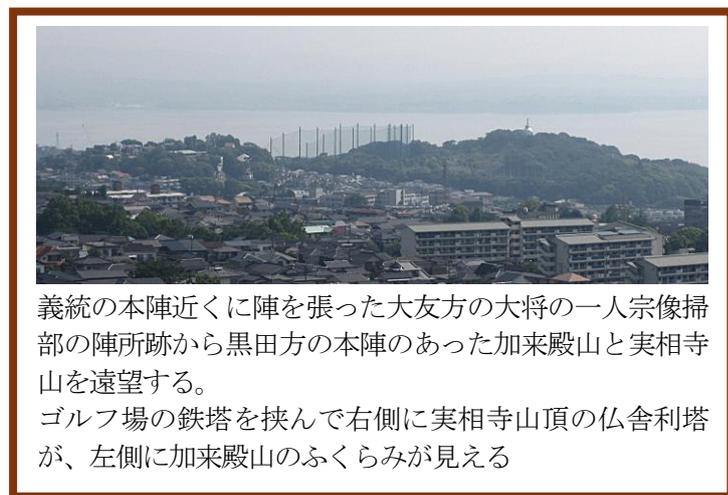
公園の南の端から、県道別府湯布院線の下をくぐるトンネルがあり、それをくぐると鶴見山一気登山のコースを示す案内板が角々にあるので、それを辿っていくと台地の上に出て大友義統本陣跡に着く。七つ石から南立石公園まで1.1キロ徒歩15分、そこからさらに1.5キロ20分程の散歩コースだが、やはり坂を上るのは些かきつい。

旧立石村（現南立石本町）の集落のほぼ中心に大友義統の本陣跡の碑が立っている。近くには天満神社があり、そこには合戦の際に鶴翼の陣の左翼を任されていた宗像掃部の墓とされる石仏群がある。宗像掃部の墓は同じ立石村の海雲寺近くにあったそうだが、集落内の道路拡幅の際に現在地に移されたそう。

この宗像掃部という人は、あまり知られていないが、苗字からすれば筑前の宗像氏であろう。彼もこの合戦で討ち死にしている。宗像掃部の陣所跡地か



観海寺のホテル街の上の集落の中ほどに、義統の本陣跡を示す石碑がある。



義統の本陣近くに陣を張った大友方の大将の一人宗像掃部の陣所跡から黒田方の本陣のあった加来殿山と実相寺山を遠望する。ゴルフ場の鉄塔を挟んで右側に実相寺山頂の仏舎利塔が、左側に加来殿山のふくらみが見える

らは、黒田方の陣構えを見渡すことが出来る。

大友義統という殿様がどんな資質を持っていたかは想像するしかないが、こんな台地の上で鶴翼の陣を張ったこと、左翼の宗像掃部、右翼の吉弘統幸の陣が、敵陣のよく見える場所にあるのに対して、本陣は台地の崖から奥に引っ込んでおり、敵陣を見ることもできなかったのではないだろうか。

どうも父親の宗麟の晩年もそうだが、武士の棟梁というより公家のような振る舞いが多く、薩摩入寇の際に真っ先にも逃げ出している。文禄の役の際に臆病の沙汰があったとして秀吉に改易されたのは、情報の齟齬による誤解によるという意見もあるようだが、結局、この石垣原合戦でも、西軍に付くことを諫められておきながら、その諫めた吉弘統幸や宗像掃部の戦死を尻目に、大将である義統は副将の田原紹忍と共に落飾して逃げていることからしても、どうもわたしは義統を勇者とは呼ぶことは出来ない。

その分、旧主の軽挙を諫めながらも見捨てることが出来ずに殉じた統幸の武者ぶりに、つい爽快さを感じてしまう。

本陣跡から宗像掃部の陣所跡までが約500メートル、6分。そこから引き返して、ホテル街を下ると、観海禅寺やラクテンチ方面に向かう橋がある、昔はこの橋から撮った桜の時期の景色が絵葉書として売られていたところだが、それを渡らずにまっすぐ別府の中心市街地の方へ降りていくと、急なカーブになっているところが吉弘統幸の陣所跡である。宗像掃部の陣所

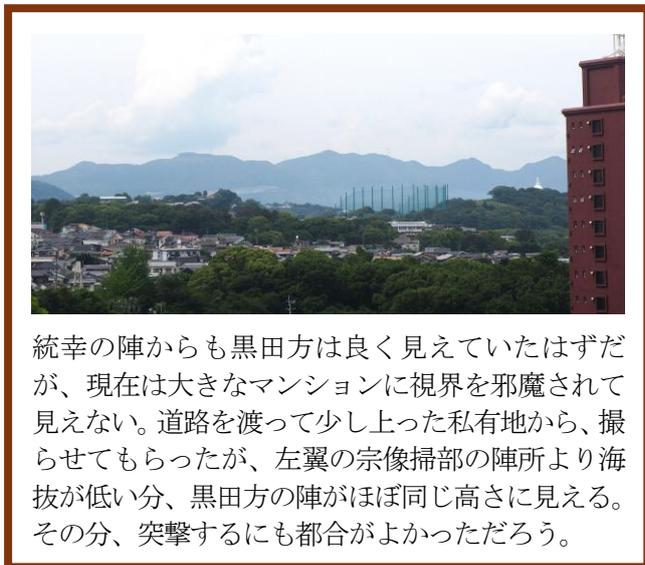
跡から約1.5キロ、約20分である。今は目の前に大きなマンションが建っていて黒田方



観海寺のホテル群への坂道の途中の見晴らし台のようなところにある吉弘統幸の陣所跡。ここには大正天皇が皇太子の時に行啓されたことを記念する石碑もある。

の本陣である加来殿山や実相寺は見えなくなっている。道を渡って脇道を少し上ると、空き地があつてちょうどどなたかが草むしりをしていたので、お許しをもらってその空き地の端から実相寺方面を眺めてみた。左翼側よりもだいぶ下がった分、実相寺と同じ高さに見える。合戦場となった石垣原や七つ石に統幸の陣は接しているという感じで、彼がここに陣を張ったことへの強い意思を感じることが出来る。

もともと統幸は義統ではなく徳川家に仕えていた大友家当主の大友義乗に加勢するために、それまで身を寄せてい



統幸の陣からも黒田方は良く見えていたはずだが、現在は大きなマンションに視界を邪魔されて見えない。道路を渡って少し上った私有地から、撮らせてもらったが、左翼の宗像掃部の陣所より海拔が低い分、黒田方の陣がほぼ同じ高さに見える。その分、突撃するにも都合がよかっただろう。

た柳河の立花家をいとまごいして上方にいた義乗の元へ向っていた。大友家の旧恩に酬いようとしていたのだ。その途上、前当主・義統と再会し、義統が大友家再興のために西軍に付くというのを、義乗の立場のことを考え東軍に加担するよう進言するが、義統は聞き入れてもらえなかった。それでも旧主を見捨てることが出来なかった統幸は、やむを得ず義統に従うことを決意している。戦国の習いとはいえ、思いとどませようとした臣下は命を落とし、怯懦な主君は戦場から逃亡して延命を図って生き延びたということになる。

統幸の武名は黒田方にも轟いていて、首実検の後は丁重に下げ渡され、黒田如水の命で統幸の故郷、豊前屋山城に送られて埋葬され、遺骸は現在の吉弘神社の西側に埋葬している。幕府に反逆した側の武将に対しては異例の扱いだったと言える。その後、彼の武勇が信仰の対象となり、墳墓に参る人々が後を絶たなかったことから、1632年頃に統幸を祭神とする石造りの祠が建てられ、1854年には拝殿も造営された。

1922年（大正11年）9月、吉弘家の子孫、関係者をはじめ多くの崇敬者により、神殿、拝殿が造営されている。わたしが子どもの頃はこの神殿、拝殿を見ていたことになる。現在の拝殿は吉弘統幸公御神忌400年の記念事業として、2001年（平成13年）4月に創建されたものだ。

統幸は別府で生まれたわけでも、ここに住んでいたわけでもないが、それでも別府の人間なら誰もが吉弘統幸の存在を誇りに思っている。

—この項終わり—

